

「アジアの星物語」が本になりました！

吉田 二美 / 海部 宣男

〈国立天文台 〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1〉

e-mail: fumi.yoshida@nao.ac.jp/norio.kaifu@nao.ac.jp



東アジア・太平洋地域の星と宇宙の神話・伝説を集めた『アジアの星物語』が、2014年2月、(株)万葉舎から出版されました。この本は、2009年の世界天文年に際し「アジアに伝わる豊かな星の神話・伝説を掘り起こし、アジアにも世界にも広めよう」という私たちの提案に賛同したアジアの天文関係者の共同プロジェクトで生まれました。アジアでの自国の星物語の出版は以前にもありましたが、アジア各国から星物語を集めて1冊の本にする試みは、世界でも初めてです。参加者は2009年5月にアジア各国から国立天文台三鷹に集結し、持ち寄った物語を報告し、出版の方針を定めました。その後も神話伝説を集め、地域で長く親しまれてきた物語などを選び編集し、日本語の翻訳完成まで、約4年を費やしました。美しい本に仕上げるデザインにも、さらに1年かけました。こうして出来上がったこの本には、アジアの13の国・地域からの68個の神話・伝説を収めています。本稿ではこの本が出来上がるまでの経緯を紹介します。詳しくはぜひ本を手にとってお楽しみください。このプロジェクトは来年の英語版の出版からアジア各国語での出版まで、また数年続きます。

アジアの星・宇宙の神話伝説が三鷹へ集結

2008年に中国・雲南でのAPRIM (IAUアジア・太平洋地域会議)で、著者の一人(海部)が参加者にこう呼びかけました。

「日本でもアジア各国でも、プラネタリウムや学校・家庭で語られている星の物語は、ほぼギリシャ・ローマ神話です。アジア諸国には豊かな星の神話や伝説が伝わっているはずなのに、それらは語られることが少なく、ほとんど知られていないのではないのでしょうか？ 私は、アジア地域に伝わる宇宙や星にまつわる神話・伝説を私たちが協力して収集し、美しい本にまとめて英語で世界に発信してはどうか、またそれをアジア各国語に翻訳し直して、それぞれの地域で出版してはどうかと思っています。来年は世界天文年です。この

機会に、アジアの星物語をアジアにも世界にも広める共同プロジェクトを立ち上げませんか？」

2009年に、世界天文年の活動が始まりました。上記の呼びかけは日本では世界天文年2009アジア共同企画「アジアの星プロジェクト」と銘打って主要企画の一つに位置づけられ、国内・国外の協力者がたくさん集まりました。

2009年5月11-13日、国立天文台の三鷹キャンパスで『アジアの星国際ワークショップ』を開催しました。アジア11カ国・地域(バングラデシュ、インド、インドネシア、香港、韓国、ネパール、マレーシア、モンゴル、タイ、ベトナムからの合計19名、日本から31名)50名が、それぞれの国に伝わる星・宇宙の神話や伝説を持ち寄り、報告しました。台湾と、太平洋諸島地域の代表は残念ながら出席できませんでしたが、星・宇宙の神話伝説をメールで送っていただき、代理の

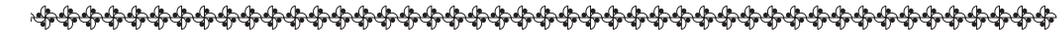


図1 2009年5月に国立天文台の三鷹キャンパスで開かれた「アジアの星」国際ワークショップ。各国の代表者がそれぞれの国・地域に伝わる星や宇宙の神話・伝説を携えて集結し、星物語をきれいな絵とともに紹介しました。

方に紹介してもらいました。合わせて13の国・地域からの70あまりの神話・伝説が集まり、東アジア・太平洋地域の星文化の豊かさを実感することができました。

このワークショップの最後に、『アジアの星物語』の出版計画を海部が提案し、それを踏まえて全参加国・地域の代表からなる国際編集委員会が結成されました。このときのベトナムの編集委員は、なんと16歳の女の子でしたが、お母さんは天文学者で、その後もしっかり代表を務めてくれました。今はアメリカの大学に留学中とのこと。

ここで決まった『アジアの星』国際編集委員会は、以下のとおりです。

Dulmaa Altangerel (モンゴル), Sze-leung Cheung (香港・中国), Yong Bok Lee (韓国), Norio Kaifu (日本: 編集委員長), Yi-nan Chin (台湾), Quynh Ngoc Loung (ベトナム), Leena Damle (インド), Jayanta Acharya (ネパール), F. R. Sarker (バングラデシュ), Siramas Komonjinda (タイ), Noriah Mohamed (マレーシア), Widya Sawitar (インドネシア), Akira Goto (太平洋諸島地域)。

また、日本での編集作業をサポートし、さらに日本での独自出版『日本の星 (仮称)』を検討しようと、以下の国内ワーキンググループが立ち上げられました。

事務局: 海部宣男*, 吉田二美, 嘉数次人, 矢治健太郎, 協力者: 北尾浩一*, 古屋昌美*, 後藤 明*, 宮地竹史*, 茨木孝雄*, 日下部展彦, 川越至桜, 漆畑 充, 匠 あさみ (*印は神話・伝説の採録者でもあります)。

苦勞した編集作業

国際編集委員の中には英語のネイティブスピーカーはいませんが、共通言語は英語しかないので、すべての物語を英語で提出してもらいました。したがって当初は、集まった物語を英語の本にまとめてから各国後に翻訳する計画でした。

2009年5月の国際ワークショップ以降も国際編集委員からさらに多くの物語が集まり、物語総数は100近くまで増えました。この中からよいものを残し、重複する話や短すぎて半端なものは除き、地域ごとのバランスもある程度考慮して、国際編集委員の合意を得、最終的に68話を収録することにしました。実は当初、このアジアの星物

語は2冊の本にまとめるつもりでした（天文月報2009年9月号p.552参照）が、出版コストや販売などを考慮して、結局1冊にまとめることにしました。

また各国・地域の編集委員には、物語のそれぞれの提出国・地域の画家に頼んできれいな挿絵を描いてもらうように依頼しました。この本の最大の特徴の一つは、東アジア・東南アジア、また文化的につながりのある太平洋地域からそれぞれの国・地域で親しまれてきた物語を選び、地域色豊かな絵で飾って、アジアの星文化を広く知ってもらおうというところにあります。神話・伝説は、それを生み出した地域や民族の文化をまどってこそ生き生きと伝わります。この本を手にとってもらえばすぐにわかるように、ページを開くごとに挿絵のタッチや色使い、雰囲気異なります。一冊の本としての統一感には欠けるところがありますが、この多様性こそ、アジアの文化を象徴するものだと思います。モンゴルの物語ではデールと呼ばれる民族衣装を着た男たちが活躍し、インドの物語ではサリーを巻いたお姫様、そしてタイの村人やインドネシアでは人形劇の人形たちが登場します。各国・地域の画家によるフルカラーの挿絵は、人々やお国柄の違い、その国・地域の植生、地形、時には空気の乾きや湿り気まで読む人に感じさせてくれると思います。挿絵を一人の画家に頼んだとしたら、到底この多様さを伝えることはできません。これらの挿絵は教育やプラネタリウムなどでどんどん使ってもらえるようにというのが、当初からの狙いでした。

さて、大事なのは出版社探しです。英語版と日本語版の検討を並行して進めましたが、どちらも難航しました。まず日本で英語の本を出すことはほぼ不可能であることがわかりました。出版社に英語の本の販路がないからです。そこでこれはどりあえずあきらめて、まず日本語版を出すことにするとともに、英語版については国立天文台ハワイ観測所の Public Information and Outreach As-

sociateであるスザンヌ・フレイザー（Suzanne Frayser）さんの好意で文法チェックをしていただき、海外での出版の可能性を探り始めました。

日本語版については、以下のような希望を出版社に提示しました。翻訳者を見つけて美しい日本語にしてくれること、美しい装丁であること、挿絵を活かすようにフルカラーであること、大人から子どもたちまで多くの人たちが楽しめること。けっこう無理な条件での出版社探しだったかもしれませんが、海部は意気に感じて乗り出す出版社を期待して大手出版社を回ってみたところ、軒並み断られました。それでも読売新聞のコラムで取り上げられたことなどをきっかけに、10社近くの出版社から筆者らのところへ問い合わせがきましたが、上記の条件で本を作ってくれるところはなかなか見つかりませんでした。なかには「とても採算が合わないのご辞退申し上げます」と丁寧なお手紙をいただいたところもありました。最終的に残った熱心な2〜3社から、優れた翻訳者を提示された「万葉舎」に決定しました。とても小さい出版社ながら特徴のある丁寧な本づくりをされていることも、気に入りました。

2010年の夏、「アジアの星プロジェクト」ワーキンググループの有志の合宿で、第1回目の本の編集作業を行いました。このときまでに吉田が日本語への下訳を終えましたが、英語の原稿を日本語に訳す際につじつまが合っていないところや説明を追加しないとわかりにくい点などが多数見つかりました。集まった物語を整理し、いくつかの国で同じような物語が提出されている場合は、完成度が高く美しい挿絵のあるものを選びました。例えば、ドゥルーバという少年が継母に玉座を追われて悔しい思いをし、修行を重ねて宇宙の不動の中心である北極星になったお話は、バングラデシュ、インド、ネパールなどのヒンドゥー文化圏で採録されています。語り口は各地域で多少異なりますが、登場人物の名前や筋書きはほぼ同じでした。ここではネパールのお話を選びました。ア



ジアにおける文化の流れも考慮しました。日本で最もポピュラーな星物語と言えば七夕伝説ですが、この伝説は中国文化の影響を強く受けた韓半島、日本、ベトナム地域に伝わっています。基本的な筋書きは同じですが、地域によってかなり変容も見られます。これは古代中国からの文化の流れによる共通性と各地の民族性を反映した多様性をともに示すものですから、それを読み取ってもらおうと、中国、日本、ベトナムに伝わるそれぞれの七夕伝説を載せることにしました。同様なことは東アジアにおける文化の二大潮流のもう一つ、古代インドを源流とするヒンドゥー文化圏にもあります。太陽や月を食べて日食月食を起こす首だけの悪魔「ラーフ」については、七夕の場合と同様、インド、バングラデシュ、インドネシアの話を収録しました。

挿絵に関しては、編集過程で不十分と判断されたものは、各国の編集委員に連絡して新たに描き起こしてもらいました。挿絵は各地域の画家にのびのびと描いてもらうため、サイズや縦横比、画材などに注文は付けませんでした。おかげでバラエティ豊かな挿絵をそろえることができましたが、挿絵に統一規格を設けなかったことは、のちに本全体のデザインを決めるときに出版社と担当のデザイナーを悩ませることになりました。この本は何人ものデザイナーを経て、ようやく現在の形に整ったのです。

画像の解像度も問題でした。挿絵は国際編集委員から電子メールで送られてきましたが、いよいよ印刷の段階で、本の印刷に耐えられる解像度に満たない挿絵がいくつも見つかりました。これは私達に一般のプリンターと絵本の印刷をする専門のプリンターの違いについての知識がなく、私達がプリントしたものでは全く問題がなかったため挿絵に解像度が低いものがあることに気付かなかったためです。最初に挿絵をいただいてから本の印刷までにすでに数年のタイムラグがあり、解像度が十分高いものを送り直してもらうことはど

ても困難でした。しかしそのような場合は挿絵を高性能なプリンターでプリントしてから高解像度でスキャンした画像を使うとプリンターが自動的に色を補間してくれてうまくいくということがあって、なんとかしのぎました。

挿絵の著作権については、2009年のワークショップの段階で著作権はすべて国際編集委員会にあることを確認しましたので、その了解のもとで描いてもらった挿絵には問題がありませんでした。にもかかわらず、なかにはインターネットから取ってきたものがいくつか混ざっていることも判明しました。そこでこうした問題になりそうなものについては国際編集委員を通じて、新たに絵や写真を提出してもらうことで、最終的に挿絵の問題は解決しました。

文章の翻訳も、なかなかたいへんでした。出版社が紹介して下さった翻訳者のお二人（柿田紀子さん、川本光子さん）はベテランの翻訳者で、丹念に下調べをしながら英語から日本語へ翻訳してくださいました。しかし天文学者ではありませんから、特に古代の天文学にかかわる部分の言葉の問題や英語の原稿に齟齬があった場合などは苦勞されたようです。お二人からは盛んに質問が寄せられ、私たちがチェックしたり調べたりしましたが、お二人の質問で初めて問題に気づくことが多々ありました。混乱を招きそうな記述の一つは、星の見え方についてでした。これは北半球と南太平洋諸島など南半球とでは星の見え方が異なることにも起因します。例えば「あの星の右下にある星」という言い方をする場合、それが南を向いて星空を見ているときと、北を向いて星空を見ているときで、「右下にある星」は異なります。典型的な例はオリオン座の三ツ星を挟んで位置するリゲルとベテルギウスです。オリオン座は天の赤道付近にありますから、北半球では南の空に、南半球では北の空に見えます。北半球から南を向いてオリオン座を見ている人にとってはベルトの三ツ星の右下の星はリゲルですが、南半球から北

を向いてオリオン座を見ている人にとってはベルトの三ツ星の右下の星はベテルギウスです。この本は北半球から赤道地域をまたいで南半球に至るまでのさまざまな地域の物語を収録しているため、星座を見る方向も変わるので、混乱しそうなところは、「上下左右」ではなく、「東西南北」で表すように書き換えました。

本の構成と登場する天体たち

この本はパートI、パートIIと解説の部分にわかかれており、北から順に、モンゴル、中国、韓国、日本、台湾、ベトナム、インド、ネパール、バングラデシュ、タイ、マレーシア、インドネシア、太平洋諸島の13カ国・地域からの神話・伝説の計68話が収録されています。パートIには国・地域ごとに32話の代表的な神話・伝説をまとめ、パートIIには太陽・月、惑星、星座、天の川など天体ごとの物語36話と、バラエティーをもたせて編集しました。それぞれの話につけた現地の画家によるカラフルな挿絵は、97に及びます（一部写真も含む）。物語が生まれた地域の画家の手によって神話・伝説を育んだ地域の民族

性・文化性が表現され、大人から子どもまで楽しめる本になったと思います。本の最後に、学校の先生やプラネタリウムや科学館の解説者、また家庭の大人たちのより深い理解のために、各地域の神話・伝説の背景となった古代インド、古代中国、それに太平洋諸島の宇宙観・文化とその流れについて、専門家による解説を加えました。

物語に出てくる天体は、一般的には目で見える明るいものに限定されています。この本に登場する天体を国・地域名と本のページ数とともに、星図(図2)に示しました。太陽や月は地球のどこでも明るく圧倒的な存在ですから、それらの物語は多くの場所で見られます。太陽と月それぞれ単独の物語もあれば、双方の誕生にまつわる話、食に関する物語など多彩です。北斗七星やオリオン座、プレアデス星団(すばる)も目立つ星の並びなので、多くの地域で物語に取り込まれたようです。ベガとアルタイルの対は七夕伝説で有名ですが、それ以外の物語にはこの組合せは登場しません。アルタイルは太平洋地域では航海の目印として重要視されており、単独で物語に登場します。全天で最も明るいシリウスは、収録された物語の

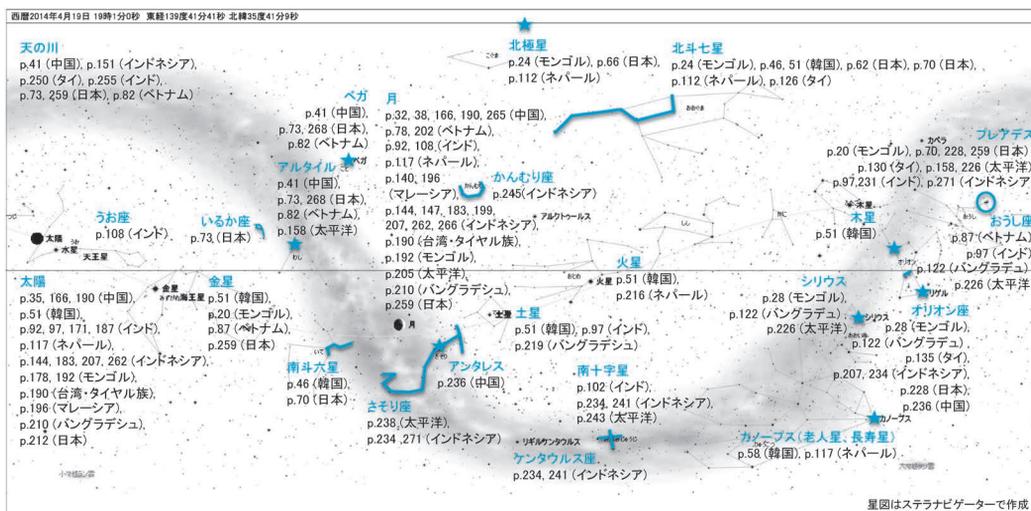


図2 物語に登場する天体たち。「アジアの星物語」に収録された物語に出てくる天体を国名と本のページ数とともに星図上に表しました。



中ではなぜか脇役として登場します。ほかの星座でも同様ですが、おうし座は西洋星座に出てくる「牡牛」の形での認識はもちろなく、この星座の中のヒアデス星団、アルデバラン、プレアデス星団らが個々に物語に登場します。一般にそれぞれの地域から見やすい明るい星が物語になる傾向がありますが、カノープスに関しては地平線や水平線ギリギリに見えたり見えなかったりすることがあってありがたがられて、北半球の国のお話にしばしば登場します。

さまざまな物語の類似性と特異性

集まった物語を全体的に眺めてみると、ある種の類似性に気づく方も多いでしょう。前にも述べましたが、この本に収録された物語の多くは、元をたどれば大きく中国起源とインド起源、それに太平洋諸島起源に分けられます。

長い歴史をもつ中国文化は、儒教やいわゆる北伝仏教を中心として、日本を含む周辺諸国に非常に大きな影響をもたらしました。前述したように日本やベトナムに伝わっている七夕伝説は中国起源の物語ですし、韓国の「北斗七星と南斗六星」も、元は中国から伝わった物語です。モンゴルの七つの太陽を弓で射る話も、中国の弓の名人羿(げい)が9個の太陽を次々に射落とす話と類似しており、起源は同じと思われます。

一方、インドはヒンドゥー教と仏教という兄弟ともいえる宗教を生み出し、まず仏教が北を通過して中国へ、南を通過して東南アジアへと伝わっています。次いでヒンドゥー教がインドを席卷するようになると、周辺諸国にはヒンドゥー文化の流れが広がりました。この本ではタイの物語に仏教の業、輪廻転生などの思想が読み取れますし、インド、ネパール、バングラデシュ、インドネシアの物語にヒンドゥー教の影響が色濃く見えるものが収録されています。

太平洋諸島はアジアの影響を受けているものの、かなり独特です。広大な太平洋諸島の民族は

太陽や月、星を頼りに航海し、星を生活の中に位置づけて独自の宇宙観を生みました。また太平洋地域のお話に惑星が一つも含まれていないのは、惑星は徐々に位置を変えるので、航海には頼りにならないものだと見なされたからなのかもしれません。

こうした物語の基盤をなす宇宙観やアジア各地域の文化や物語の流れと変化の過程については、本書の最後に三つの「解説」に加え、太平洋地域の民俗学を専門家としておられる後藤 明先生に総合的な解説をいただいています。

日本の星物語

この本では、日本に伝わる星の神話伝説・星文化を、八つ紹介しました。パートIには「サマエンの星」(北斗七星)、「徳蔵と北極星物語」、「七夕さまと瓜畑」、「むりかぶしゆんた」(すばる)、パートIIには「天岩戸に隠れたアマテラス」(太陽)、「イワンノチュウ」(すばる)、「船人たちの星歌」(月、金星、すばる、天の川)、「七夕祭り」です。

日本は古代中国と古代朝鮮の文化の影響を大きく受けていますが、しかしそれだけではありません。北はオホーツク文化、南は太平洋文化の影響も受けています。したがって、日本の北東部にはオホーツク文化系の影響を受けた物語が、中部は中国系、南西部は中国と海洋系の文化の影響を受けた物語が語り継がれています。中国系の文化は、天と人とは相互に関係し合い作用し合っているという「相関宇宙論」を基礎とし、地上は天の北極に坐す天帝の意向で治められるという「天の思想」に基づいています。ですから「天下」、「天子」、「天命」、「則天去私」などという言葉や概念があるのです。こうした考えに基づく中国星図はすなわち天の世界地図で、天の北極に天帝、周囲の星は天官(天の官僚、貴族)であり、それを取り巻く城郭や街です。皇帝は天を観測する天文官を置き、天象を観測させて日食、彗星、新星など



した。ワーキンググループはこのプロジェクトの副産物を利用して本にまとめ、「日本の星（仮称）」の出版を企てています。この本では、日本の各地方独特の星の名前やその起源を探り、星の名所を訪ねる旅の企画もたてました。そう、日本の星ガイド。そんな本を作る作業が進んでいます。まだ本のタイトルは決まっていますが、近い将来出版される「日本の星」、ご期待ください。

最後に、本号の書評ページにこの本が紹介されています。ぜひご覧ください。

問合せ先

海部宣男（かいふ・のりお）

「アジアの星」国際編集委員会委員長

電話：042-675-5150

FAX：042-375-4967

e-mail: norio.kaifu@nao.ac.jp

吉田二美（よしだ・ふみ）

「アジアの星」編集ワーキンググループ

電話：0422-34-3947

FAX：0422-34-3800

e-mail: fumi.yoshida@nao.ac.jp

アジアの星webページ

<http://www.astronomy2009.jp/ja/project/asian/publication/book.html>

謝 辞

国際ワークショップの開催、本の出版準備作業など「アジアの星プロジェクト」の活動にあたっては、放送大学教育振興会、天文学振興財団、国立天文台から資金面などでの援助をいただきました。深く感謝いたします。また本文でも述べましたが、アジア各国から集まった多彩かつ難解な英文を辛抱強く翻訳してくださった柿田さんと川本さん、そして「アジアの星プロジェクト」の趣旨に賛同し、儲けを度外視して美しいフルカラー、かつ安価な本として出版していただいた万葉舎の尾関とよ子社長ほか社員の皆様の心意気に、心から感謝いたします。